I・活動概要

「ESD×生物多様性」プロジェクトの概要

「ESD×生物多様性」プロジェクトが目指すもの

生物多様性は持続可能な社会の基盤となるものであり、その保全には、自然に大きく影響を及ぼしている私たちの暮らしや地域や社会のシステムのあり方を変えていくことが重要です。地域の自然やその風土に基づく暮らしの知恵、そのうえに発展してきた地域独自の文化を大切に思える人や地域をどうやって育み、維持していくのか。流域や生命地域圏（バイオリージョン）における循環型経済をどう組み立てていくのか。これらの課題に取り組むには、研究者や専門家だけではなく、地域に暮らす人々による主体的な参加と自治、多様な主体の連携と協働が欠かせません。つまり、自然科学的なアプローチだけでなく、ESD的なアプローチが重要なのです。

ESD-Jではそのような考えのもと、2010年10月に名古屋で開かれる「生物多様性条約第10回締約国会議（CBD/COP10）」への提言も視野に入れ、「ESD×生物多様性」をテーマにした3カ年事業（2009－2011）をスタートさせました。

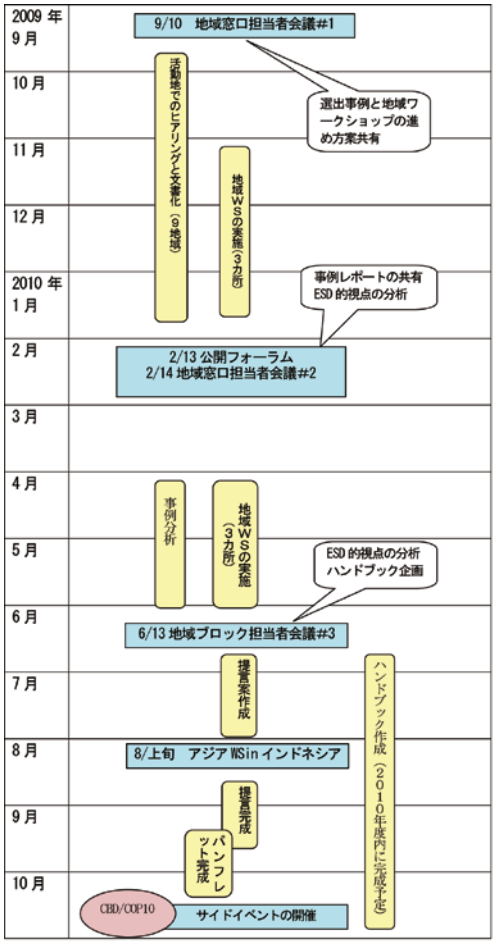
この事業では、日本各地で既に実施されている、生物多様性を大切にした地域づくりの実践をとりあげ、その中の人づくりや住民参加の側面に焦点を当てて調査・文書化を進めました。そして、現地でのワークショップや全国フォーラムを開催し、地域のESD実践者や生物多様性保全活動を進める関係者と事例を分析し、生物多様性保全につながるESDの姿を明確にしていきました。次年度は、その成果をもとに、ESDの視点からCBD/COP10に向けた提言を作成し、日本国内および、特にグローバル化・急激な近代化の中で日本と類似の課題に直面しつつあるアジア・アフリカにおける持続可能な地域づくりに貢献するとともに、生物多様性を大切にした地域づくりを進めるためのハンドブックを取りまとめる予定です。

「ESD×生物多様性」プロジェクトの進め方

このプロジェクトは、2010年10月に開催されるCBD/COP10を折り返しポイントとして、前期と後期に分かれます。前期は生物多様性保全につながるESDの事例調査をもとにしたCBD/COP10への提言およびハンドブックの作成、後期はその提言やESDのノウハウを各地に普及するための活動を展開する予定です。

2009年度は、全国を10の地域ブロックに分け、ESD-Jの会員さんに地域担当を担っていただきました。そして秋から冬にかけて「ESD×生物多様性」のキーワードにフィットする実践事例を各地域1件選び、ヒアリング調査を行い、レポートを書いていただきました。また、近畿、北陸、北海道でESDや地域づくりに関心を持つ人とともに、事例報告をベースとしたESDのあり方を議論する地域ワークショップを開催、2010年2月13日には全国の実践から学びあう「全国フォーラム」を開催しました。

2010年度は、さらに数カ所で地域ワークショップを開催し、CBD/COP10に向けた提言とハンドブックの取りまとめを進めていきます。



前期の実施スケジュール

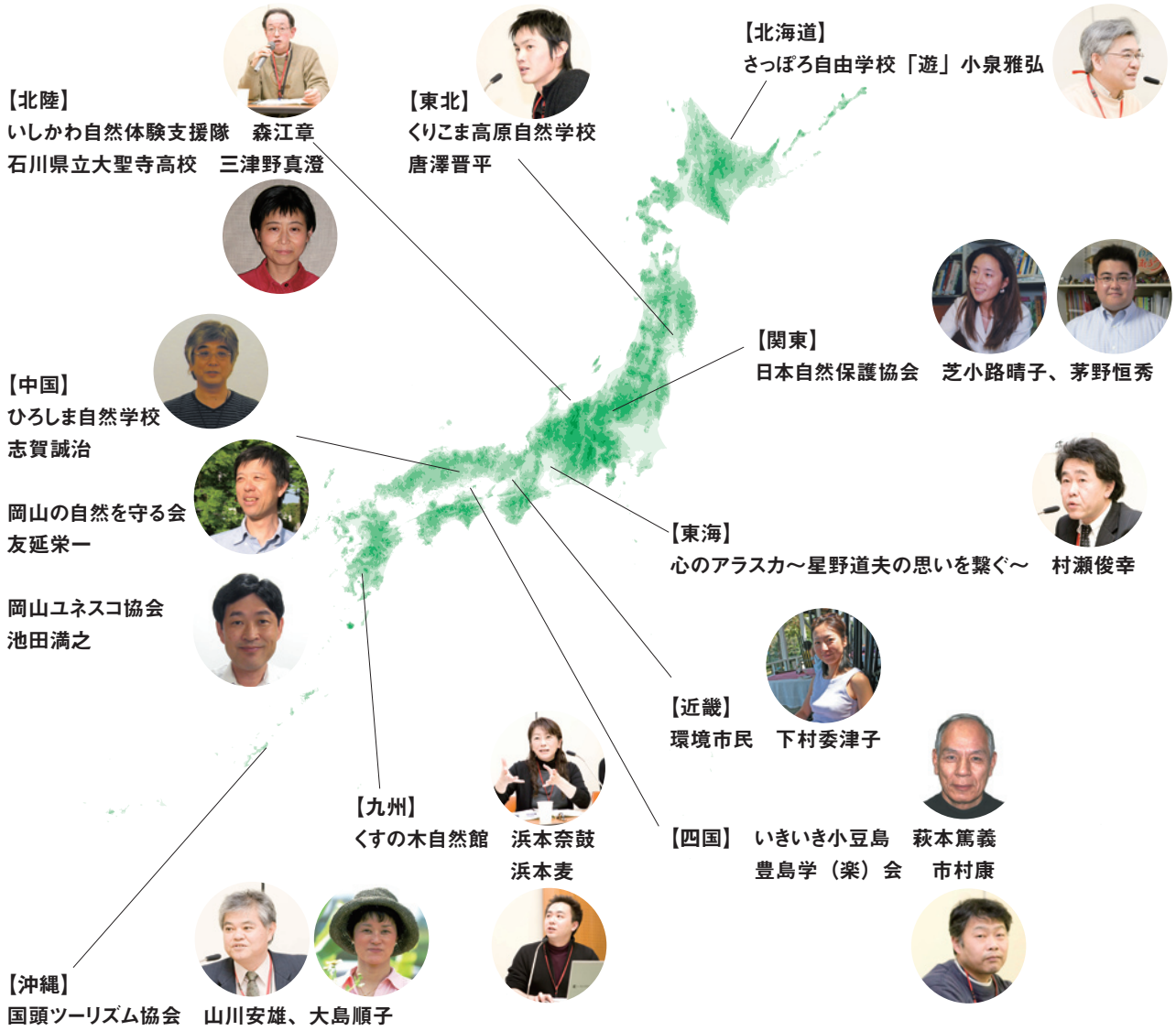
10地域ブロックでの取り組み

事例調査と地域ワークショップ

9月には10の地域ブロック担当者が集まり、プロジェクトの目標、進め方、事例をレポートする上でのポイントについて共有、その後近畿を除く各地でヒアリング調査を行い、レポートをまとめました（☞Ⅱ章）。また、近畿、北陸、北海道では、ESDや地域づくりに関心を持つ人とともに、事例報告をベースとしたESDのあり方を議論する地域ワークショップを開催いただきました（☞Ⅲ章）。

生物多様性を大切にした地域づくりにおける「人づくり」や「学びの場づくり」の側面にスポットをあてた各地のレポートの概要は、次ページからご覧ください。

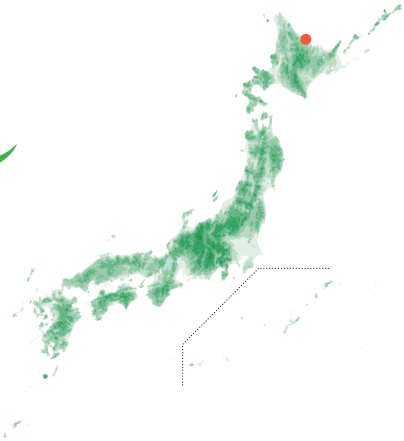
各地でこのプロジェクトを担ってくださった皆さん



【地方EPO】地方環境パートナーシップオフィス（EPO）の皆さまにもご協力いただきました。
（北海道）有坂美紀、（東北）谷田貝素子、杉山ふじ子（関東）後藤奈穂美、（中部）新海洋子、桜井温子、（近畿）原田智代、成山博子、（中国）杉山利文、松尾健司（四国）池田幸恵、（九州）澤克彦

【ESD-J】　担当理事：森良、鈴木克徳　事務局：村上千里、野口扶弥子

自然と文化の多様性を実現し先住民族の権利を回復



地　　域：北海道紋別市
実施主体：NPO 法人さっぽろ自由学校「遊」

key word：先住民族の自己決定権・自治権、アイヌ民族との共生、アイヌ生存捕鯨、河川・森林環境保全、産業廃棄物最終処分場

マレク（突き鉤）を使ったサケ漁の様子（ESDツアーから）

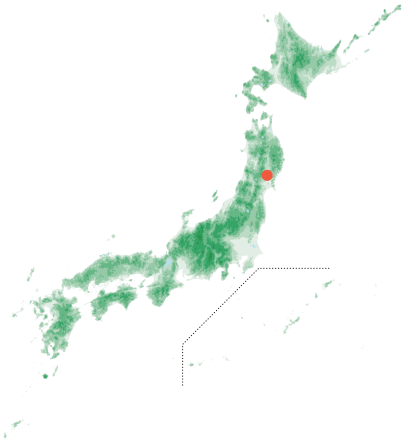
アイヌ民族の権利回復に基づく共生社会の実現は、北海道のESDにおいて不可欠なテーマです。さっぽろ自由学校「遊」は、北海道的ESDを模索する中、紋別市のアイヌ民族・漁師の畠山敏さんに出会います。畠山さんとその仲間は、沿岸捕鯨や海や河川の持続可能な資源管理を、民族の権利回復と合わせ提言活動をしていました。

「遊」は、個の取り組みを広く地域に広げるため、ESDツアーや地域ワークショップを実施。モペッ・サンクチュアリ・ネットワークが立ち上がり、アイヌの視点からの持続可能な紋別に向け、組織的活動が始まりました。

三室番屋で開拓以降の紋別の漁業の歴史を聞く（ESDツアーから）

モペッ・サンクチュアリ・ネットワークが立ち上がりました（地域ワークショップから）

農山村に学ぶ
持続可能な暮らし



地　　域：宮城県栗原市栗駒松倉中山田
実施主体：くりこま高原自然学校

key word：地域自給、地域循環、自然との共生、結、過疎・高齢化、地元学、里山整備、伝統的な知恵

伝統的なはざがけ「ねじりほんにょ」

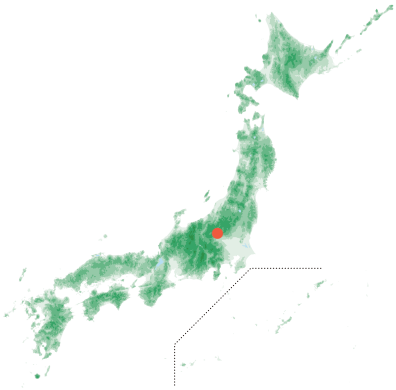
岩手・宮城内陸地震による退去をきっかけに、くりこま高原自然学校は、田んぼや山に囲まれた伝統ある農山村の山田集落で活動を開始。過疎・高齢化が進むこの地域には、伝統的なくらしの知恵、結などの互助制度などが、今でも残っています。

くりこま高原自然学校では、こうした暮らしをESDとして発信していくため、子どもキャンプ、スタディツアー、地元学ワークショップなどを実施してきました。地域内部からは見えにくい地域の魅力を地元の住民が気づき、地域再生に多くの人を巻き込んでいくための活動を、地域に寄り添いながら進めています。

地域の知恵を伺う地元学ワークショップ

地域との意見交換会の様子

官民の学び合いを通した国有林協働管理



地　　域：群馬県赤谷川源流部
実施主体：林野庁関東森林管理局、赤谷プロジェクト地域協議会、㈶日本自然保護協会

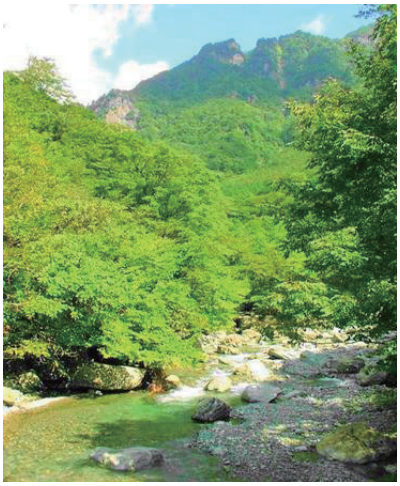
key word：スキー場開発計画、官民による国有林協働管理、自然再生と地域再生、住民による地域調査、協働による教育効果

赤谷の日いきもの調査の様子

首都圏の水源利根川上流部に位置する赤谷の森。1983年、ここに大規模なスキー場開発が計画されました。地域住民らによる地域の生態系調査の結果、開発計画は撤廃。地域住民・林野庁・NGOが協定を結び、協働で国有林を管理する、「赤谷プロジェクト」が始まりました。

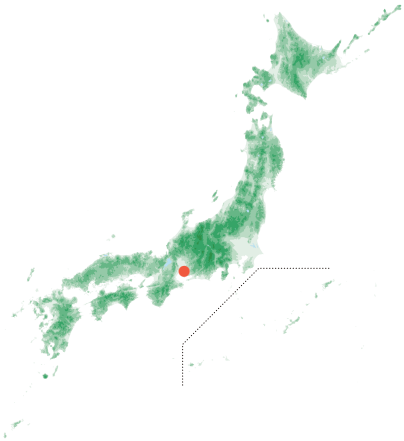
森林の生き物調査や、人工林を自然林に変えるための森林管理、ダム撤去などの自然再生活動が、地域活性化と連動しながら進められています。官民の相互の学び合いが活動に意識的に盛り込まれており、NGOや住民が行政の下請に陥らない工夫が施されています。

紅葉の中での観察会



赤谷川源流部

藤前干潟を守りぬいた市民運動からの学び



地　　域：愛知県名古屋市
実施主体：NPO 法人藤前干潟を守る会　ほか

key word：ごみの最終処分場建設、シギ・チドリの日本最大級の渡来地、保全管理、開発行為、参加と対話、地域力、情報戦略、当事者意識、判断と責任、国内外のNGOの連携、リーダーシップ

観察会

藤前干潟

クロツラヘラサギ

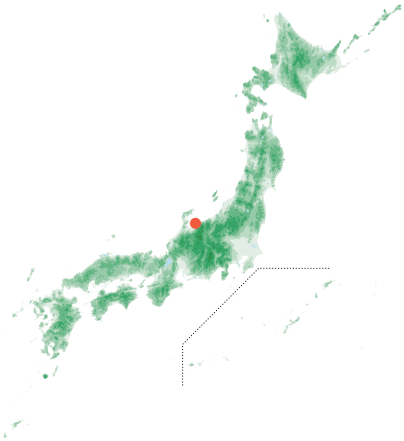
干潟には命がいっぱい

1984年、伊勢湾奥部に残された約300haの干潟をごみの最終処分場にする計画が持ち上がりました。「日本最大級のシギ・チドリの渡来地を自分たちの出すごみで失ってよいのか？」立ち上がった市民たちは、組織的な保全運動を展開。15年後、名古屋市は計画の中止を決定しました。

この運動のプロセスから私たちは、多くの人や組織の共感を引き出し、パワーを結集し、多様な対象に合わせたアプローチを組み立てる工夫と、それらを可能にするリーダーのあり方を学ぶことができます。

市民に向けたニュースレター

高校生の力を
地域の里山再生に活かす



地　　域：石川県加賀市
実施主体：石川県立大聖寺高等学校

key word：エコスクール活動、里山整備、地域の森の再生、学校・地域の連携、過疎・高齢化

元気な高校生の力で下草刈りも一気にすすむ

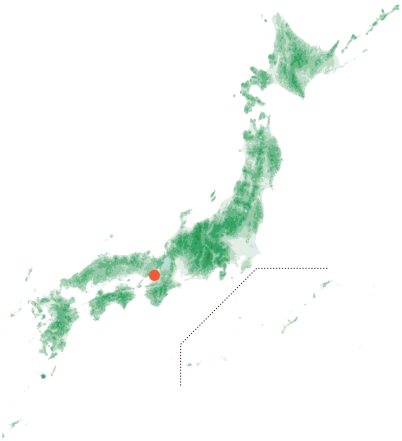
大聖寺高校東部に位置する「三谷」では、過疎高齢化で里山が荒廃していました。「元気な高校生の力を里山再生に活用できるかもしれない」―こんな声から、2002年より、聖高環境保全プロジェクトSEPの一環として、生徒による里山整備ボランティアが開始しました。

試験の後や土日の下草刈りや間伐、枝打ちなど、地道で肉体的にもつらく、危険の伴う作業ですが、地域貢献の活動を通し、高校生が生き生きとするようになりました。現在、里山整備ボランティアは、県の生涯教育講座として指定も受け、数多くの一般市民が生徒とともに活動に参加しています。

地域の方に指導を受けながら間伐作業をすすめる

SEPではエコスクール活動にも取り組む

立ち入り禁止の原っぱを自然豊かな遊び場に



地　　域：大阪府豊中市
実施主体：天竺のはらっぱであそぼう会

key word：都市公園、子どもの遊び場、地域の公共空間、自然好きの大人と子どもの交流、公園の草地管理

立ち入り禁止の公園が地域の人々の憩いの場に

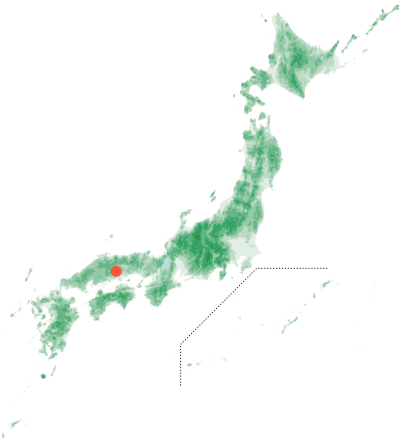
どんな虫がいるのかな

ごみの不法投棄などの問題で立ち入り禁止になっていた公園の一角が、地域の母親たちの働きかけで、自然豊かな子どもたちの遊び場として、月に2日だけ解放されることになりました。今は地域の様々な人が集い交流する居心地の良い空間となっています。

原っぱでは自然好きの大人たちが生きもののことを子どもたちに教えてくれたりもします。そして、もっと多様な生き物が棲める環境を整えようと、業者まかせだった公園の草刈りについて、希望を言うようになりました。草の高さを変えるように刈ることで、そこに棲める虫の種類が増えるのです。

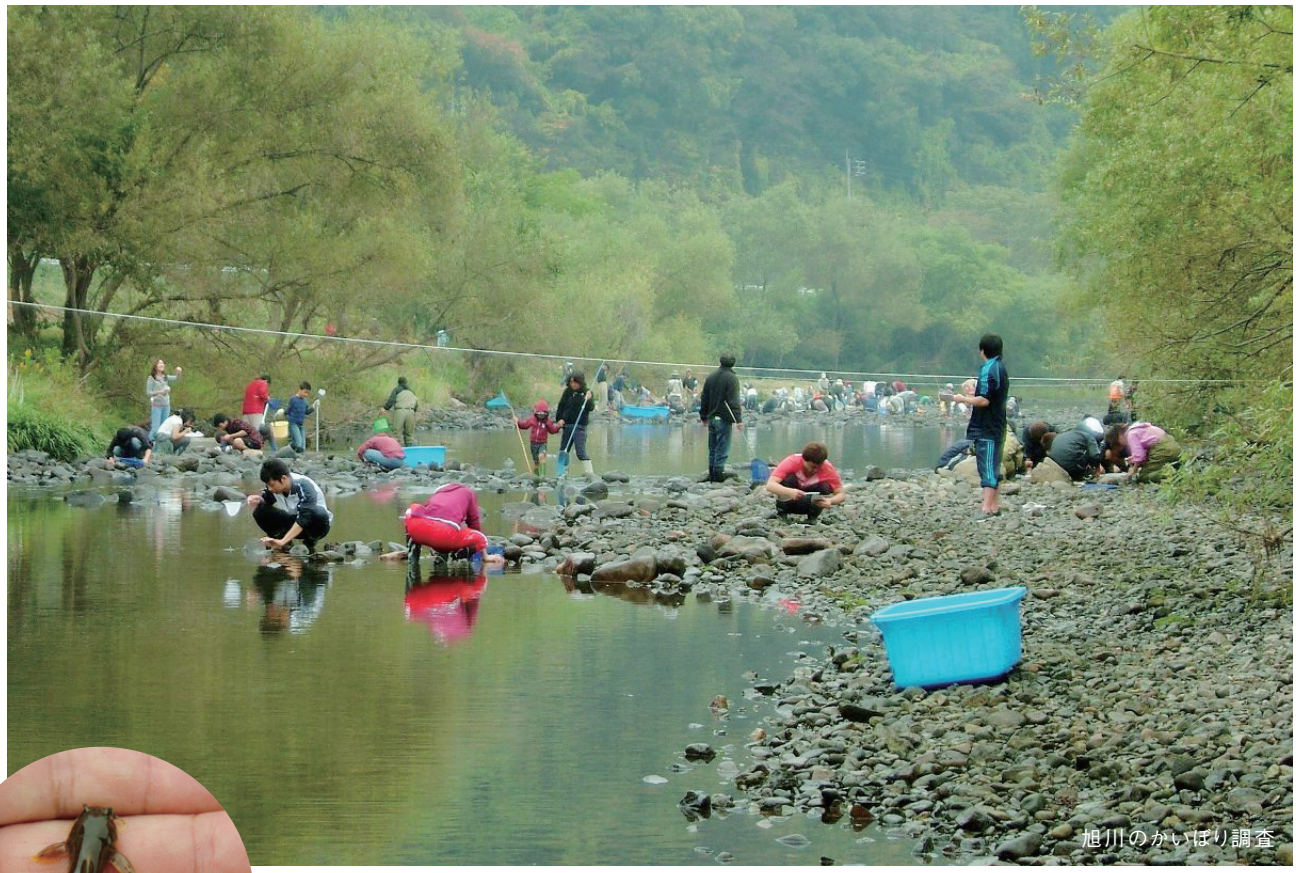
近畿では事例研究ではなく、地域ワークショップで議論を深めました。そこでは、一人ひとりが生物多様性を大切に感じられる「場」づくりの重要性と、生物多様性保全の活動のプロセスをとおして「持続可能な地域づくり」を担う主体者が育まれていくことを学びました。そのひとつの事例が「天竺のはらっぱであそぼう会」の活動です。

生きものの里づくりで
地域と小学校を元気に



地　　域：岡山県岡山市建部町竹枝地区
実施主体：竹枝を思う会

key word：里山、小規模校、水辺の楽校、ホタル、てっきり（アカザ）、川遊び、学校支援ボランティア、かいぼり調査、大学との連携、生きものの里づくり、住民による土木工事

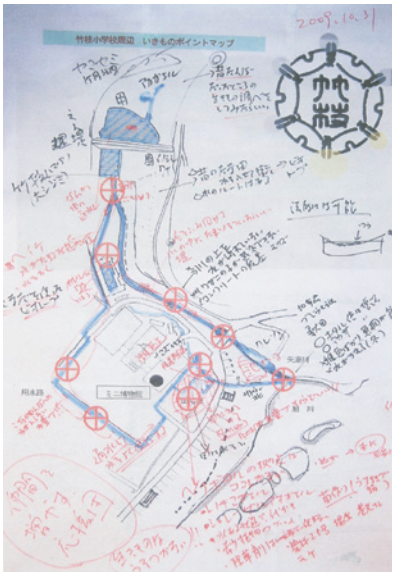


旭川のかいぼり調査

てっきり

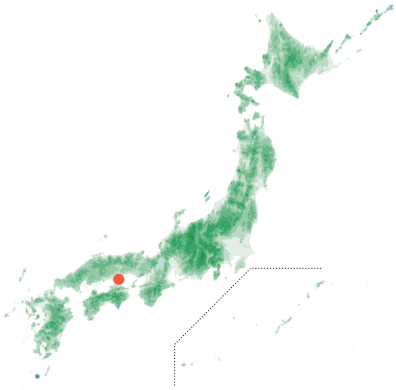
竹枝地区は人口755人の小さな学区。竹枝小学校は児童数30人の小規模校です。そんな中、小学校は地域の宝、子どもたちに“ふるさと”の良さを伝えていこうと、住民有志による「竹枝を思う会」が発足。

まずは、学校の前を流れる川の水辺環境を整備し、かつて川遊びをした環境を復元しました。そこで、自然の宝物探しや、ホタル狩り、河原キャンプ、裏山体験など「水辺の楽校」を続けています。また、川を堰き止めて干上がった川の魚を拾う「かいぼり調査」など、自然環境を把握し、よりよい環境づくりに生かす試みを地域学校、地域外応援団が協働で行っています。



生きものの里づくりの勉強会で作成した地図

豊島の教訓を語り継ぎ 島の再生に取り組む



地　　域：香川県豊島
実施主体：廃棄物対策豊島住民会議／豊島・島の学校実行委員会　ほか

key word：瀬戸内海の島、産業廃棄物の不法投棄、公害調停、豊かな島、島の学校、海の生物定点観測、棚田の米づくり

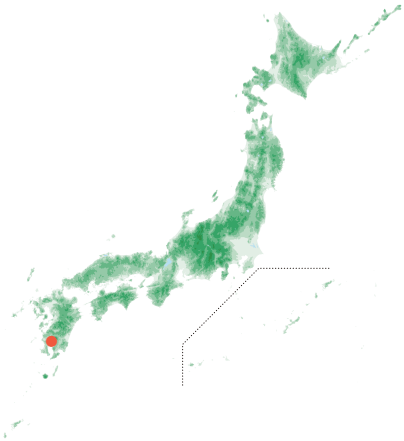
島の学校での地引網体験

有害廃棄物を島に持ち込み違法な処理を行っていた産廃業者が摘発されたのは1990年。その後10年かかって勝ち取った公害調停で、産業廃棄物の本格的な撤去と処理が始まりました。暫定的な環境保全工事で廃液の流出を止めたことで、海にアマモが戻り、生態系が回復しつつあります。

島ではこの教訓を島外の人たちとも共有する「島の学校」を開催。公害調停を支援した弁護団やマスコミ、科学者、そして島民が、多様な切り口で豊島の教訓と魅力を伝えています。また、生物調査や棚田米づくりなど、豊な島を取り戻す試みが広がっています。

豊島の美しい棚田

重富干潟小さな博物館が地域をつむぐ



地　　域：鹿児島県姶良市
実施主体：NPO 法人くすの木自然館

key word：白砂青松、生物減少の原因究明調査、昔の景色を取り戻す、海岸清掃活動、散乱ゴミの調査、地域の人たちの思いを形に

毎日のゴミ拾には地域の子どもたちも参加

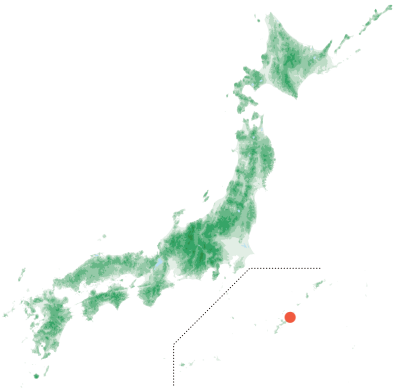
「重富干潟小さな博物館」は、2006年、鹿児島湾の奥部にある唯一の広大な干潟に、産・官・民・学・NPOの協働で生まれました。「優先すべきは地域の利益、尊重すべきは地域の個性」を合言葉に、鹿児島の豊かな自然を後世に受け継いでいくために、環境教育と調査研究活動を展開しています。

開設当時この海岸は、ごみがあちこちに散乱し、治安の悪いさびれた場所。でも「昔の白砂青松の美しい海岸に戻したい」という地域の方のつぶやきから、海岸の大掃除がスタート。今では海岸はにぎわいを取り戻し、地域活性化の拠点になっています。

広大な重富干潟

博物館に続くまつぼっくりロード

村に必要な学びを村人自身でつくる



地　　域：沖縄県・沖縄島北部（やんばる）
実施主体：沖縄県国頭郡大宜味村、東村、国頭村の地域づくり関係者

key word：3村の協同事業、村民による企画委員会、持続可能な地域づくり講座、自然・文化体験ツアー、やんばるの資源、地元のインタープリター・コーディネーター

案内人は地域の人（大宜味村）

やんばる3村は沖縄島北部の亜熱帯の森とサンゴの海に囲まれた自然豊かな地域。しかし人々の生活やツーリズムなどの経済活動が、自然環境への負荷を増大させつつあります。そこで3村が共同で、地域の資源を守り、生かしながら暮らしていくとはどういうことなのかを学び、考え、持続可能な地域づくりにつなげていくための協同事業をスタートしました。

行政職員や事業者、NPOスタッフなどが集まり「3村に必要な講座を自分たちで作ろう」と企画検討委員会を発足。地域の人たちが村の魅力を再発見することから、講座を始めています。

海からマングローブの森へ（東村）

森をゆっくり感じる（国頭村）

「ESD×生物多様性」全国フォーラム

～生物多様性条約第10回締結国会議（COP10）に向けて～

雪に見舞われた2010年2月13日、東京都渋谷区のガールスカウト会館で「ESD×生物多様性」全国フォーラムを開催しました。フォーラムの目的は、本プロジェクトの中間報告と関係者の学びあい、そして交流です。CBD/COP10に向けた市民の動きの報告をいただいたうえで、全国10地域の取り組みを共有し、生物多様性を大切にした地域づくりにつながるESDのあり方、ヒント、課題を実践者の皆さんと探りました。

＜全国フォーラム概要＞

日　時：2010年2月13日（土）
　　10:00 ～17:00
　　（17:30 ～19:00　懇親会）
会　場：ガールスカウト会館
参加者：47名＋発表者・関係者25名

＜プログラム＞

10:00 ～10:05　**ごあいさつ**
　鈴木克徳（ESD-J理事、金沢大学）
10:05 ～10:30　**ESD×生物多様性プロジェクトが目指すもの**
　森 良（ESD-J理事、NPO法人エコ・コミュニケションセンター）
10:30 ～11:00　**CBD/COP10に向けた市民セクターの動き**
　羽後 静子氏（中部ESD拠点協議会運営委員会、中部大学国際関係学部）
　川廷 昌弘氏（生物多様性条約市民ネットワーク、博報堂DYメディアパートナーズ）
　新海　洋子（ESD-J理事、中部環境パートナーシップオフィス）
11:00 ～16:40　**地域の取り組み紹介**
　第1部（コーディネーター：森良）
　　北海道・オホーツク・紋別におけるESDの動き（小泉雅弘）
　　宮城県・山田集落に学ぶ持続可能なくらしの実践と発信（唐澤晋平）
　　沖縄県・やんばる3村持続可能な地域づくり応援講座（山川安雄）
　第2部（コーディネーター：鈴木克徳）
　　北陸・生物多様性保全に向けた北陸の里山保全等の取り組み（森江章）
　　群馬県・AKAYAプロジェクトでの取り組み（芝小路晴子）
　　近畿・近畿ワークショップin京都（下村委津子）
　第3部（コーディネーター：新海洋子）
　　愛知県・藤前干潟に学ぶ（村瀬俊幸）
　　香川県・豊かな島“豊島”産廃からの再生と生物多様性への取組み
　　（市村康）

鹿児島県・重富干潟再生プロジェクト～地域資源再生への道～
（浜本奈鼓、浜本麦）

第4部　ふりかえり＆共有（コーディネーター：森良）

17：30 ～19：00　懇親会

＜フォーラムの議論から＞

◆CBD/COP10に向けた市民セクターの動き

・生物多様性は、我々の暮らしになくてはならない。その恵みに感謝し、それを多くの人たちに伝えていくことが大事。

・生物多様性条約の中に条約を貫く精神はあるのか。人びとの誇り・知恵・知識が入ってこそ、自分たちの条約といえる。

・COP10は、国内の里山の荒廃に対し、都市生活者がそれにどう取り組むべきかという国内の南北問題を考える場でもある。

◆地域の取り組み紹介

報告内容は、本報告書のⅡ章・Ⅲ章を参照ください。より詳しいディスカッションはウェブサイトからご覧いただけます。

＜第一部＞

・先住民族の保護を声高にすればするほど分断は進むと思われる。だが、先住民族の権利が何かということをまず伝えていくことが必要

・グリーンツーリズムは、長期的に見て持続可能でない。理想は、地域の中でエネルギーや食を自給できるようにすることが目標である

・林業だけでは食べていけず、森林業という考え方がでてきている

・地域自給ということをベースにした深みのある、都市と農村の交流が必要

＜第二部＞

・小学生も高校生も教員も、半強制的でもいいので、自然体験活動に参加させる場が必要。

・中高大の縦の連携と、学校と地域という横の連携を広めることが大事。

・地域の人にとっては当たり前なことであるため、地域の人々がその大切さに気づかないまま継承されていることが多い。それを明確にし、発信することが大事。

・生物多様性の恵みや価値観の部分は、具体的な目標になりにくい。経済的にその人たちが暮らしていく仕組みづくりがファーストステップ。森や山からの有形無形の恵みを受けているという満足感は、次のステップとしての価値観の設定ではないか。

＜第三部＞

・藤前干潟でも、どんな生き物がいるかということをずっと調査されてきた。科学的な調査は大事。

・まずは「できる」を見せること。干潟の再生へのかかわり方・伝え方を変えることで、みんなが当事者になるしくみを作っていった。

・日常的に見せる場、コーディネートできる人が重要。そこに誰かが常時いる、ある程度いるというしくみが必要。それは行政がやるべきなのか、NGOがやっていくべきなのか。
・研究者が学問以外に島の人と関われる場も必要。何かいいことがあったら知らせる、見たくないことも知らせてあげる。
・政策への反映は活動の成果。この力を持つには調査・研究能力が必要。それと共に、周りの仲間の信頼を得ていくことも必要。それには地元における地道な活動が必要。1つの主体だけでは絶対にできない。コラボレーション、つながる力をつけることが大事。

<ふりかえり&共有>

参加者全員で、フォーラムを通してピンときたヒントをポストイットに書き出し、下記4つのヒントに分けてボードに張り出し、共有しました。出てきたキーワードはウェブサイトをご覧ください。

・地域再生の人づくり／コーディネーターの役割に関するヒント
・生物多様性が地域文化や地域経済の再生につながっていくヒント
・社会開発における異なる立場の人々の、対話や合意形成のあり方に関するヒント
・その他、生物多様性を大切にした地域づくり・人づくりにおけるヒント

ESD×生物多様性しんぶん

ESD-Jでは、本プロジェクトのプロセスや成果を多くの方々に伝えるべく、季刊で「ESD×生物多様性しんぶん」を発行、ESD-J会員をはじめ、全国の環境教育施設やNPOセンターなどで配布しました。しんぶんには、毎回「せいぶつたようせいQ&A」を設け、以下の皆さんに解説していただきました。しんぶんは、ESD-Jウェブサイトからもご覧いただけます。

2009年夏号

Q「生物多様性条約とは?また、COP10ではどんなことが議論されますか?」
回答者:環境省自然環境計画課課長　星野一昭氏

2009年秋号

Q「人と自然が折り合う地域づくりに向けた国際的な取り組みにはどんなものがありますか?」
回答者:国連大学高等研究所上席研究員　名執芳博氏

2010年冬号

Q「生物多様性条約COP10に向けて、日本のNGOはどんなことをしていますか?」
回答者:生物多様性条約市民ネットワーク運営委員　原野スキマサ氏

2010年春号

Q「先住民族と呼ばれる人々は、名古屋の生物多様性条約COP10になにを期待していますか?」
回答者:市民外交センター代表、恵泉女学園大学教授　上村英明氏